

第4回やすらぎ堤デザイン検討委員会

議事要旨

日時：平成27年10月7日（水）13：30～15：30

場所：新潟市役所白山浦庁舎7号棟405会議室

議事次第：1. 開会

2. 第3回委員会までのご意見と対応について

3. 市民意見の聴取結果について

4. 委員会及び市民からの意見の反映について

5. その他

6. 閉会

1. 開会

岩佐委員長より挨拶

事務局より配布資料の確認

2. 第3回委員会までのご意見と対応及び市民意見の聴取結果について

第3回委員会の「議事要旨」および「意見と対応」のまとめ方について了承された。

3. 委員会及び市民からの意見の反映について

オブザーバー：天端通路は、歩行者と自転車が混在して利用するというということで良いか。

事務局：あくまで歩行者優先の空間だが自転車の通行も許容する。当面は現況と変わらない。自転車は、なるべく堤内地側の道路へ誘導することを考えている。

オブザーバー：川の中に人が入れる場所での安全対策はどのように考えているか。

事務局：親水利用を促す整備は、原則として水深が浅い箇所に限る方針である。自由使用の範疇と考えており、柵を設けるなどの安全対策は行わない。

オブザーバー：水は決して綺麗とは言えず、川底が見えるような状態でもない。深み等に気づかない可能性もあるので、安全対策に十分配慮したほうが良い。

委員長：天端通路における歩行者と自転車の混在は、道路交通法の改正もあり、今後、利用者意識の高まりによって、歩行者への配慮が進むのではないかと期待している。

委員長：LEDを使用するとなっているが、より良い技術が開発される可能性もある。「省電力に配慮する」と言った表現にしておいたほうが良い。

委員：資料5、P23でシンボルツリーは未整備区間に整備するとなっているが、整備済み区間では不可能なのか。

事務局：未整備区間の提案は、水門直下の死水域を活用している。整備済み区間は治水を再優先となるので、影響のない範囲として、堤内側での対応になると考える。

委員：水面レクリエーションを導入していくという言葉があるが、具体的にはどのような活動を導入するのか。台船の配置など、具体的な対応はミズベリングでの検討になるのか。それともやすらぎ堤のハード整備での検討になるのか。

事務局：ミズベリングを始めとしたソフト面と並行して、検討を進めていきたい。

委員：天端に出るあたりに案内看板がほとんどない。街側から堤防に登る地点には、行先を示すサイン等が必要である。

事務局：新潟市の都市サインマニュアルを参考にしながら、今後の検討課題として対応していきたい。

委員長：資料中の例示写真は、あまり人が写っていないため、殺風景な印象がある。もう少し、賑わいのあるイメージの写真を使用してはどうか。

委員：全体的なスケジュール感と、今出されているメニューのおよその優先順位について、決まっていれば教えてほしい。市民にアピールするためにも、スケジュール感を示したほうが良い。

事務局：現在、昭和大橋と千年大橋の右岸で整備を進めている。その中で、可能なところは本委員会の方針を踏まえて整備に反映したいと考えている。整備済み区間は、更新時の対応となるが、具体的なスケジュールを示すのは難しい。

委員：専門用語は解りやすく変更できないか。一般の人にも分かりやすくしたほうが、有効ではないか。また、この検討の目玉が何なのか、売りとなるものを分かりやすく示して欲しい。

委員長：どう整備するかということも重要だが、どう使うか、利用のイメージがセットになって盛り込まれていると、一般の方も理解しやすいだろう。

委員：ガイドブック（資料 6）を公表する際は、信濃川下流河川事務所の名前で出すべきではないか。委員会の成果を受けて、河川事務所が公表するというスタンスのほうが良いと思う。これに合わせ、新潟市も名前を出して内容に責任を持つようにしたい。

委員：他の委員の意見も聞いたうえで、どうするか判断したい。

委員長：本委員会の成果としては、委員会名義のガイドブックとし、これを受けて、新潟市及び信濃川下流河川事務所にて、個別あるいは連名での成果を取りまとめるということによっていかと思う。

委員：ガイドブックという名称のニュアンスが良く理解できない。ガイドライン的要素も入っているので、別の名称としてはどうか。

委員長：将来に向かっての目標として提示されていくものであれば、ガイドブックという形をとって広く市民の方にビジョンを共有して頂くことが重要かと思う。しかし、これを受け

て事業主体が方針を定めていくなら、「提言」とするなり、これがオピニオンになるということを確認にした方が良い。

委員：委員会はこれからも継続するのか、今日で終わりかによっても扱いが変わるのではないかと。今後、市民目線での色々な意見を受けとめる組織として継続したら良いと思う。

委員：今回については、ここで一旦成果をまとめ、閉めさせて頂きたい。今後については、状況の変化を見て考えたい。

委員長：今回も市民から多くの意見を頂いている。今後も持続的に意見をフィードバックしていく仕組みがあっても良いと思う。

委員：今後のロードマップは国が作るのか。

委員：当然事業中のものは、ある程度の年次を示すことはできる。それ以外のものは、具体的な年次等までは難しいが、概ねの優先順位であれば発表できると思う。

委員：予算のつき方もあるので、具体的な年次を示すことが難しいが、概ねのスケジュール感を持っている。

委員：ガイドブック（資料 6）p25 で、事例として載せられている阿武隈川の写真をみると、なぜこのような植栽が信濃川でできないのかとってしまう。

委員長：河川の安全性を最大限考慮すべきという前提があるので、河川にいろいろな物を置いたときに発生するリスクなどをあわせて示すことが必要かと思う。

委員：事例写真には、このような植栽がなぜ許されるのか、例外的な事例であることを付記して欲しい。

委員：各拠点で色々活動が位置づけられているが、イベント促進のためには電源や水などの基盤整備が必要となる。次のステップでは、これらを具体化していく必要がある。

事務局：現在、新潟市が主体となって「かわまちづくり計画」の作成を並行して進めており。本委員会での提案も踏まえて、イベント利用に配慮した付帯施設等の検討を始めている。

委員：このガイドブックは市民向けに公表するのか。これを下さいと申し出たら貰えるようなものなのか。お母さんたちは自分の興味ある部分しか見ないと思う。また、何時どのように整備されるのかを知りたいと思う。このためには問い合わせ先を明記するようなことも必要ではないか。

事務局：現冊子は行政担当者向けと考えている。市民向けのものでは頂いた意見に配慮していきたい。

委員長：本ガイドブックは、今後どのような形でリリースされるのか。

事務局：今回の議論を踏まえて何点か修正し、10月中を目処に新潟市及び信濃川下流河川事務所のホームページで公表したい。

4. 閉会

新潟市 大沢土木部長よりあいさつ

以上